戦後日本の知識人と語りの構造

——藤田省三におけるレトリックと読むことについて——

Intellectuals in Postwar Japan and Their Modes of Address:
On Fujita Shozo's Theoretical Thought about Rhetoric and Reading

新 倉 貴 仁
NIIKURA Takahito

The article is intended to shed light on the theory of rhetoric in the context of social science in postwar Japan through a close reading of Fujita Shozo, a leading disciple of Maruyama Masao. By virtue of his analysis of Japanese militaristic imperialism, Maruyama had been regarded as a representative intellectual of the post-war period of Japan. In 1969, however, in the midst of the surge of the student movement, he was criticized as a representative of the Establishment. At the same time, Fujita attempted to reconstruct the methodology that he had inherited from Maruyama in order to respond to the social transformation catalyzed by the rapid economic growth. Considering the theoretical continuity and discontinuity between Fujita and Maruyama, this article scrutinizes the problem of rhetoric in the context of the sociology of the intellectuals

はじめに

本稿は、戦後日本の批判的知識人の一人として、藤田省三に注目し、知識人の語りの様態という問題から、戦後日本社会に生じた断層を再考していく。

藤田省三は、丸山眞男の政治思想史の方法論の継承者として、『天皇制国家の支配原理』での分析や、思想の科学研究会の共同研究「転向研究」への参加で知られる。丸山が、1968 年から 69 年にかけての学生叛乱で、「戦後民主主義」の象徴として批判され、心身ともに消耗する一方、藤田は、1970 年代に、自らの方法論の組み換えを行っている。二人の知識人の間に生じた距離の背景には、「高度成長」による社会変容があった⁽¹⁾。

高度成長が戦後日本社会にもたらした変容については、戦後社会／ポスト戦後社会、夢の時代／虚構の時代など、さまざまに観察され、記述されてきた〔見田 1995; 大澤 1996; 吉見 2009〕。また、この時期に展開された丸山への批判は、戦後日本の代表的知識人の失墜を意味し、一つの時代の終わりとして解釈されてきた〔都筑 1995; 小熊 2002; 竹内 2005〕。しかし、丸山と藤田の間には、連続と非連続が錯綜しており、それぞれを、段階的に類型化した社会に配分するだけでは十分ではない。

丸山と藤田の両者は、連続するゆえ、断絶する。藤田は、丸山から、時代の制約や条件についての反省を要請する方法論を継承している。藤田は、高度成長による戦後日本社会の変容に対して応答するため、方法論を再編成する。

丸山と藤田の両者は、断絶しつつ、連続する。丸山は、知識人として批判されつづけてきたが、社会の変容は、批判自体の存立機制を揺るがす。藤田は方法論を再編成するなかで、語りかけの問題に向き合い、丸山と連続していく。

両者の間に生じた距離は、思想的意義にとどまらず、〈現代社会〉についての思考としての意義をもつ。高度成長による社会変容のなかで、藤田の方法論的転回の意義をどのように考えるか。また、知識人の存立機制自体が揺らぐような変化が生じているのである

とするならば、そのなかで知識人論はいかにして成立しうるのか⁽²⁾。

1. 藤田省三と丸山眞男——その思想史的連関⁽³⁾

(1) 藤田省三について⁽⁴⁾

藤田省三は、1927年に生まれ、18歳のときに終戦を迎えた。丸山眞男の「超国家主義の論理と心理」や「軍国支配者の精神形態」といった論文に触発され、丸山のもとで学ぶことを志し、東京大学法学部に入学する。

その初期の代表的な仕事が、天皇制国家の分析である。1956年の彼の代表的な論文「天皇制国家の支配原理」は、丸山の政治思想史の方法を継承し、天皇制国家の内在的分析を行ったものである〔藤田 1956=1997〕。また、1957年からは、「思想の科学」研究会の「転向」の共同研究に参加する。マルクス主義と天皇制国家の衝突において生じた「転向」についての研究は、その両者をめぐる考察を内包する。

同時期、丸山は、スランプに陥っていたと告白している⁽⁵⁾。方法としてのマルクス主義と、対象としての天皇制という、彼の思考を駆動させてきた二つの敵が弛緩し、丸山自身も思索の緊張を失ってしまう。スターリン批判や六全協決議により共産党の権威が衰え、大衆天皇制の成立が論じられるように、戦後社会は変質しつつあった。

1960年の安保闘争では、藤田は、丸山や鶴見俊輔らと行動を共にし、民主主義の確立を呼びかける多くの文章を著している。安保闘争の後、1962年におきた『思想の科学』の天皇制特集号問題で、同研究会から離れている。丸山とは、石田雄とともに「正統と異端」共同研究を行っていたが、1967年から69年の渡英により中座する〔石田 2005〕。

1969年に帰国した藤田を待っていたのは、より切迫した時代の変化であった。藤田は、帰国後、最初に、『高度成長』反対」という名の文章を発表する。この年、丸山は東大闘争に巻き込まれ、戦後民主主義の象徴として、学生からの批判を一身に受け、体調を崩す。丸山は、1971年に定年をまたず、東大教授を退官し、藤田もまた、所属する法政大学の大学紛争の調停に尽力したのち、1971年に退官する。

1970年代、大学教授のポストを離れた藤田は、出版社のセミナーや各種の読書会を企画しながら、人類学や神話学の成果を自らの方法論に取り入れていく。そして、1982年に、『精神史的考察』を発表する。そこでは、高度成長批判の主題が一貫しながら、極度に切り詰められた文体で、「没落」や「敗北」から、「経験」の痕跡が探究される。

(2) 連続と非連続

藤田省三が丸山眞男から継承し、両者の間で共有されたものは、思想史における方法論である。丸山の政治思想史は、マンハイムの知識社会学などの影響を受けつつ、上部構造としての思想の相対的自律性を主張するものであった。方法論の中核にある存在拘束性は、決断し、その責任を担うような主体を要請する⁽⁶⁾。

1957年の廣末保との対談で、藤田は、自らの方法について言及している。第一に、「時間的な継起、いわゆる『流れ』としてではなく、時間を超えて私の前に広がっている経験的現実」として歴史を捉える。第二に、「歴史形象をそれ自体として、つまりその歴史的個性を『理解』しようとする」。そして、第三に、恣意的な解釈を避けるために、「人類社会の『歴史法則』を抽出」する歴史哲学を模索する〔藤田・廣末 1957=2006: 9-10〕。

歴史への内在の意識は、内在的批判という方法に連なる。内在的批判とは、藤田が、天

皇制国家を存立させる論理を分析する方法論であり、「対象それ自身の論理にくぐり込んで、対象をして自らの論理的帰結の前に立たしめ、それによって批判しようとする」ものである〔藤田 1966=1997:289〕。丸山もまた、1953 年の文章で、「対象の内側からの把握を通じてそれを突き抜けて行く」という表現で、同様の方法に言及している⁽⁷⁾。

以上のような丸山と藤田に共有された方法とは、自らが組み込まれた状況を伶俐に認識することによって、それへと働きかけていくものである。市村弘正によれば、藤田は、「徹底的な『対象内在的』認識と『函数的』自己認識を通して、不断に他者性に関与する普遍的精神の担い手であろうとした方法的ラディカリストであった」〔市村 2010:418〕。時代に対する批判的介入を企図することは、同時に、最も深く時代性に貫かれることになる。それは、戦後の天皇制国家批判、1960 年の安保闘争、そして後年、藤田が、先駆け、徹底した高度成長批判に繋がっている。

しかし、1969 年以降、藤田と丸山の間に距離が生じる。対象の認識は対象への関与に相関し、対象である社会の変容の認識は別の働きかけの編成を要請する。社会の変容にともなう知識人の観察と記述の実践は変容する。このことを、いかに考察すべきだろうか。

2. 知識人の社会学

(1) 知識社会学と知識人の社会学

知識人をめぐる社会学的な考察について、古典的なものとして、ドイツ文化社会学の流れにある知識社会学があげられる。マンハイムは、マルクス主義の影響のもと、「思惟の存在被拘束性」を理論の中に組み込み、「普遍的イデオロギー」の担い手として、階級色の薄い「社会的に浮動するインテリ層」の可能性を唱えている〔Mannheim 1929=2006〕。

上部構造の相対的自律性をとなえるマンハイムの議論は、広く西欧マルクス主義とよばれる議論の特徴である。だが、知識人に可能性を見出そうとするマンハイムに対し、アルチュセールは、1970 年の論文「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」で、知識人もまた権力装置の一部であることを指摘している〔Althusser 1970=2010〕。この論文は、国家権力から、微細にはりめぐらされた権力へという権力概念の変容を先導し、知と権力の問題系を開示する。この問題系は、ミシェル・フーコーやジル・ドゥルーズらに共有され、ポストコロニアル研究やカルチュラル・スタディーズへと継承されていく⁽⁸⁾。

ピエール・ブルデューの知と権力の結びつきの社会学的分析も、同じ問題圏のなかにある。ブルデューは、科学論の系譜から連なる認識論をめぐる問題意識と、知の様態をめぐる問題意識を根源に有しているフランス社会学の系譜の合流地点において、「社会学の社会学」あるいは「知識人の社会学」を唱えている〔Bourdieu 1980=1991〕。これは、「場」の概念により、さまざまな知識人の実践を資本の獲得をめぐる闘争として分析する道筋を開く。くわえて、「世界について思考したり語ったりすることをわれわれに可能ならしめているものの全体、つまり、われわれの思考カテゴリーのなかで、われわれ自身が動かされているのだということを思い起こさせる」として、社会学そのものの実践についての反省や、知識人の実践についての反省を促す〔Bourdieu 1980=1991:82〕。すなわち、「知識人の社会学」は、資源をめぐる支配関係を扱う権力分析と、実践についての反省を扱う認識論の二つの局面を含む。

この視座から見ると、丸山の存在は両義的である。権力分析からすれば、丸山は、大学という制度の権力と結びついた特権的な存在である。しかし、認識論からすれば、丸

山は、存在拘束性を方法論の核とするため、その実践には、つねにすでに、反省が作動している。さらに、知と権力の問題系の背景には、単一の権力から、遍在する微細で無数の権力へという権力概念の変更がある。権力が全域化し、あらゆるものが権力に貫かれているのであれば、権力とのかかわりで知識人を批判することは無意味ではないか。

(2) アドレスの問題

マンハイムやブルデューを参照し、知の存立を社会学の課題とすると、そこには常に観察と記述の実践をめぐる認識論的な問題が付随する。また、権力を遍在するものとして捉えるならば、常に自らも権力に貫かれていることになる。これらのことは、自らが組み込まれたものとのかかわりとして、「批判」をめぐる問題構成を変更させる。

このとき、ジュディス・バトラーが、アルチュセールとブルデューの両者の検討を通じ、認識可能性と権力の問題を考察していることが注目される [Butler 1997=2004]。

バトラーは、アルチュセールの「呼びかけ」の議論に反論し、「呼びかけ」が一方方向のプロセスではないことを指摘する。「呼びかけ」の光景が成立するためには、「呼びかけ」られる側が、それを求め、受け容れる必要がある。アルチュセールの議論が、「呼びかけ」の背後に大文字の主体（国家）の権力を隠しているのに対し、バトラーは応答や承認といった光景の内部に、権力の作動を見出す。

また、バトラーは、ブルデューの発話の遂行性についての分析に反論する。ブルデューによれば、発話行為が有する力能は、言説の外部にある社会権力に由来する。それに対し、バトラーによれば、発話行為の遂行性は、発話が、新たな意味を創造し、正統とされるものを転覆させる力能をもつ点で、発話の構造の内部に由来する。

バトラーは、発話行為における発話可能性が、あらかじめの排除という言説構造によって成立することを強調する。権力は、排除として否定的に機能するのではなく、むしろ生産的に機能する。アルチュセールとブルデューは、発話行為の外部に、起源となる権力を設定する。だが、権力は、発話行為の引用と反復によって生じる。アルチュセールとブルデューは、発話行為の外部に「社会」をみるのにたいし、バトラーは語りの構造の内部に「社会」を見出していく。

バトラーの構築主義的な一連の議論は、権力概念の変容にともない、「主体」、「社会」、「批判」といった諸概念の布置を書きかえる試みである⁽⁹⁾。起源となる単一の権力を想定することで、権力の外部を想定することができ、その外部からの批判が可能になる。だが、権力が微細で遍在するものであれば、主体や批判の問題構成も変更せざるをえない。このとき、知と権力の媒介項であり、言語を通じて対象に働きかける存在としての知識人もまた、その存立機制を変更させざるをえない。

3. 藤田省三における「社会」

(1) 高度成長批判

イデオロギーや場といった概念装置を通じて思考するならば、1969年に丸山に向けられた批判は、普遍的知識人の特権性を暴露するものと解釈しうる。だが、遍在する微細な権力という権力概念の変容は、従来のイデオロギー批判の基盤を侵食する。とするならば、丸山と藤田の距離を、権力概念の変容とそれにとまなう批判概念の変容という観点から、改めて考える必要がある。藤田は、何を批判し、同時に、どのように批判するのか。

まず、藤田の高度成長批判の論点を確認しよう。

1969年の『『高度成長』反対』や「根拠律」といった文章において、藤田は、次の三つの点を批判している。第一に、対象について知るということのために必要な努力と手続きが無視されつつある。第二に、過去の実験から学ぶことが軽視されつつある。そして、第三に、状況に埋没するか、自我に没頭するかで、状況と自我との双方への緊張が喪われつつある〔藤田 1969a=1998; 1969b=1998〕。

藤田の高度成長社会の把握は、環境破壊や大衆社会化といった経験的水準だけではなく、精神の変容という抽象的水準で行われている。しかし、それゆえ、その批判は、高度成長社会の機制に迫る。高度成長とは、①語る根拠を失い、②過去を忘却し、新奇なものばかり注目していく結果、③緊張を失い、自我と状況が摩擦なく結びつくことに結実する。

高度成長という社会の変質は、社会を構成する〈個人〉の存立基盤自体が揺らぎつつある点において、問題とされている。それでは、〈個人〉という主題は、藤田の著述でどのように語られてきたのであろうか。

(2) 〈個人〉の形象

〈個人〉の形象は、藤田の著述のごく初期から登場する。たとえば、1956年に出版された久野収と鶴見俊輔による『現代日本の思想』への書評のなかで、状況への拘束を前提とした主体のありようが論じられる。

「日本の伝統」は、「民族の伝統」への感傷を動員するという形においてではなく、又自ら感傷的に埋没するという形においてでもなく、われわれの主体の動かしがたい内面的肉体と先ず捉えられ、次いでその肉体の構成的契機が認識され、更にそれに対する自律的選別が可能となり、遂にわれわれの社会的行動を内面から起動し又規律する大きな力となるであろう〔藤田 1957=1998:41〕。

内面から主体を拘束する伝統を認識することを通じて、はじめて、主体が存立可能となる。制約されている状況を認識し、その認識を通じて、状況への参与／離脱の選択が可能となる。状況に埋没することなく、状況からの離脱の可能性を想定することによって、普遍的原理を内面化させた〈個人〉が出現する。

このような〈個人〉の形象は、藤田の著作では、普遍的原理の確立という課題として一貫して希求されている。藤田のマルクス主義への評価も、「普遍者の生産」を行ったことに由来する〔藤田 1958a=1998〕。転向研究では、福本一夫が扱われ、そこに、「ズルズルベッタリ」の状況追従主義からの切断、超越主義、一元方法的批判主義を特徴とする「理論人」の形成をみている〔藤田 1959a=1997〕。転向は、状況と自己という関係性の中に位置づけられ、「状況＝大衆に対する働きかけ方の能動的变化であるから、それに伴う、自己批判と反省を片面に含まねばならない」〔藤田 1959a=1997:3〕。

〈個人〉は、その内面に、状況への能動的作用と、自己への反省という、緊張関係にある二つの契機を並存させる。このような〈個人〉の形象は、丸山が『忠誠と反逆』で描き出す、状況との緊張関係におかれ決断する〈個人〉の形象と地続きのものであるといえる〔丸山 1960=1998〕。

(3) 〈国民〉という社会

〈個人〉の形象の追求は、安保闘争をめぐって、一つの頂点をむかえる。

1960年の『『五・一九』前史』という文章で、敗戦の経験は、「闇市的状況」として肯定的に捉え返される。それは、人びとにはじめて「自然権」を自覚することを可能にさせた。「自然権」を自覚するとき、それを普遍的原理とする「自然権的絶対化」と、所与の制度の存立を相対化する「制度相対化」が可能になる。藤田は、この戦後の経験を基底とすることで、戦前の国民とは異なる〈国民〉を構想する可能性を模索している。

敗戦による国家機構の崩壊とともに、日本では祖国と国民の観念も四散した……国家に先んじて独立のネーションの観念が存在することができなかったことは、たしかに日本の近代化の構造の弱い面である。……しかしだからこそ根底的にその構造を改めて行くためには、国家の随伴物になっているようなそんな脆弱な国民の観念は跡形もなくなってしまう方がよい、という面もあるのだ。明治以来の建物が焼け落ちるのとともに国家制度という機構的建物がことごとく廃墟と化しても、なおその荒野の中に厳然と見えざる精神の秩序として立っているような「祖国」と「国民」の観念でないのなら、それはむしろ完全に一掃された方がよい。……いっさいの制度から独立した人間の交流を通して相互生存の規範が生み出されたときに、はじめて制度に対する日本人の主体性が回復され、制度を与えられたものとして見る思考法が改められる。したがって、制度を不断に作り直すとする精神が生れる。そこに存在する日本人の共同性の意識こそが権利の上で独立した存在としての「国民 nation」もしくは「市民」なのである。戦後の状況はその可能性へのチャンスであった〔藤田 1960=1998:230-1〕

ここでのべられる〈国民〉は、理念として位置づけられている。同時に、〈国民〉は状況であり、〈個人〉は、そこに自らも含まれつつ、同時に、自己を冷静にみつめる眼差しに支えられている⁽¹⁰⁾。

この呼びかけは、二つの形象を要請している。第一に、状況の中において制度を不断につくりだす〈個人〉である。第二は、国家から独立した領域として、人びとによって相互に生きられる〈社会〉と重なる、〈国民〉である。前者は後者の構成員であり、戦後の経験が、その実現可能性を担保する。だが、高度成長は、普遍的原理をもった〈個人〉と、それが構成する国家の外部にある〈国民〉の存立可能性を切り崩していく。

4. 藤田省三におけるもう一つの〈社会〉

(1) レトリック論

高度成長が〈個人〉の存立基盤の地崩れを引き起こすのであれば、〈個人〉の再生や、国家から独立した〈国民〉の構築といった課題は、きわめて困難になる。また、批判という営為も変質をこうむらざるをえない。1970年代以降の藤田の言説実践——人類学や歴史学の方法論の吸収、緊密に切り詰められた文体、書評のスタイル——は、このような視点から理解される必要がある。

これらの語りの問題への注目が、もう一つの高度成長批判の方向となる。

1976年に藤田は、「レトリックとは何か——その批判的考察」という文章を発表している〔藤田 1976=1998〕。レトリックという主題は、1970年代以降、とりわけ1974年の花田清輝の死をきっかけとして、頻繁に論じられる。この論文では、高度成長や管理社会化が、言葉の問題として捉えなおされている。

まず、藤田は、戦争中、中野重治が著した斉藤茂吉についての文章のレトリックを評価する。その主題である「文化価値」は、国家のイデオロギーと対立し、それを受け入れている社会の時代状況そのものとも対立し、そのことによって表現の強度をましていく。その語りかけの宛先は、「可能的聴衆」である。それゆえ、語りかけは、深く、広いもので

なければならない。時代状況との対抗ゆえに必要となる「防衛」と「挑戦」、そして可能的聴衆に語りかけるために求められる「想像の喚起」、これら三重の機能が、「多義性」を構成する。藤田はここに、「生きたレトリック——精神的存在としてのレトリック」をみる〔藤田 1976=1998:302-3〕。

次に、藤田は、戦後において、「解放の時代に特有な、自由な精神の働き」を見出し、それを「標語デモクラシー」と質的に対立するものと考え。自由の精神の働きは、「批評的精神」をもって、「自分が有機的に組み込まれている社会関係の精神を『物』として即物的に腑分けし検討する作業」に向かう〔藤田 1976=1998:310〕。

以上の議論を経て、藤田は、言語についての考察を展開する。まず、人間の言葉が、多義性をもつ象徴的用法（象徴的多義性）と、一義的明晰さを重視する記号的使用（記号的一義性）の二つに整理される。両者の相互補完関係によって、「含意」と「明晰」、「ふくらみ」と「収斂」、「強度」と「やわらかさ」の調合が可能になる。次に、人間の言葉に、機構の言葉が対置される。機構の言葉では、信号のように、文脈があらかじめ定められ、一語一語の一義性が始めから与えられている（信号的一義性）。そこでは、象徴的多義性と記号的一義性という人間の言葉の対が喪われる。

高度成長社会とは、あらかじめ一語一語の意味が定められた信号の一義性が、人間の社会を併呑した状況である。そして、喪われた象徴的多義性と記号的一義性を再生しようところみることが、高度成長への批判をかたちづくる。

（2）〈読む〉ことと〈社会〉

以上のような藤田のレトリックの議論は、管理社会批判といった性格をもつ。だが、そこで提起される批判の方法は、信号的一義性の否認だけではなく、言葉の「ふくらみ」や「明晰さ」の再生である。

この批判の方法は、1982年に出版された『精神史的考察』を貫く。そこにおさめられた断片的な文章は、いずれも、没落や敗北といったモチーフを基調とし、死物や断片を拾い集め、そこから別の可能性を解き放つことを目指している。「変革期」や、危機の時代が注目され、さまざまな可能性を秘めた「始まり」の時代として再解釈されていく。没落や敗北といった否定的なモチーフは、「始まり」や「混沌」がもつ両義性のふくらみによって、不思議な明さが与えられている。

この著作を貫くもう一つの主張が、〈経験〉の意義である。〈経験〉は、「人と物（或は事態）との相互的な交渉」を意味し、心身全体の行う物事との交渉とされ、「物」の水準を含む〔藤田 1982=1997:30〕。このとき、社会とは、人と人とのコミュニケーションの集合性だけを指すのではなく、人と物との関係性までも含めた総体として成立する。

この〈経験〉とのかかわりから、藤田の〈読む〉ことへの思索が理解される。〈読む〉ことは、モノとのかかわりの一つの行為である⁽¹¹⁾。レトリックが、一義性と多義性の調合によって明晰さとふくらみをもたらす語りかけの方向として作用するのだとすれば、〈読む〉ことはその成立過程を遡っていく応答の行為である。「物」あるいは「物事」と出会う経験としての〈読む〉ことは、徹底され、強度を獲得し、普遍性へと開かれていく⁽¹²⁾。

この〈読む〉ことへの思索は、同時期に書かれた西郷信綱の論考と重なる。西郷は、古典文献学の方法論を学ぶために、藤田が師事した人物である。1975年の西郷の「《読む》という行為」という論文では、〈読む〉ことの「複雑な構造」が分析され、根源的な「学

問上の問題」の一つと位置づけられる。背景にあるのは、藤田と同様の社会変容についての観察である。「ことばが『事』であること、存在であることをやめ、もっぱら機能あるいはメッセージと化し、それにつれことばを、たんに何かを表示する記号と考える趨勢がいよいよ強まってきている」。存在としての言葉が失われ、「経験との連関が切れた」状態で流通している。だが、〈読む〉行為は、存在としての言葉との交わりという点で、〈個人〉の存立機制にかかわる。本来、「作品を読むとは作品と出会うことであり、出会いとしてそれは、深い意味での一つの歴史的経験に他ならない」。出会いとして捉えられるとき、〈読み〉は、共時だけではなく、通時でも変化してくる。すなわち、過去の私は、今の私とは異なる。この意味で、「自己はつねに他人のはじまりである」。このとき、〈読む〉ことは、〈個人〉の形象を複数化し、その輪郭を揺るがしていくような契機となっていく[西郷 1975=1979:122-6]。

ここにもうひとつの〈個人〉と〈社会〉の対が登場している。方法論的転回以前の藤田において、普遍的原理の担い手としての〈個人〉が、国家の外部にあるような〈社会〉を構成する。しかし、高度成長による社会変容に対する応答として、方法論的転回をおこなった藤田において、〈社会〉はその都度、死物や断片から発見されていく関係性の痕跡として想像されている。〈個人〉はむしろ、そのような関係性に常に開かれた存在として描かれることになる。レトリックと〈読む〉ことの主題は、主体と対象の関係性を可能にする媒介そのものの先行性へと注目させる。

(3) 丸山と藤田の連続

レトリックと〈読む〉ことの主題によって、丸山と藤田は再び接近する。なぜなら、「レトリック」は、藤田が、丸山の方法論に言及した初期の文章に出現するからである。

1959年の鶴見俊輔、久野収との共著『戦後日本の思想』で、藤田は「社会科学者の思想」を担当し、丸山眞男と大塚久雄に言及している。そこでは、①科学を支えている理論以前の観念的エネルギーの重視、②科学的記述と評価の峻別と並び、③その「レトリック」が注目される。社会科学者である丸山の「レトリック」は、一方で、「極端に緊密なスタイル」をとりながら、他方で、「論文の中に西欧音楽的な構成的リズムと日本的雄弁の方法である講談の断片の文句を組み合わせ」たものとされ、花田清輝における「レトリック」と同等視される。藤田によれば、これは「科学のコミュニケーション」についての考えかたの革新であり、レトリックによって、「ある程度作品そのものの中に、作家の感性的な人間像を読みとることができる」とし、そこに「本当の意味での知識人」の誕生を見出す。それは、「人間の過去に対する追体験と、未来に対する想像力の行使による理解という、経験的な現実を超えた理解力を獲得する」ものである。このように知識人を設定するとき、その機能は特定の社会層に限定されるのではなく、むしろ「普通人」の要件を意味する[藤田 1958b=1998:90-92]。

レトリック論は、高度成長により変容した社会への批判という意味を有していた。だが、同時に、それは、丸山と藤田を結ぶ一つの線分が前景化してきたことも意味する。レトリックの再生とは、丸山のある側面を再生し、継承することである。それは、一つの戦後精神であり、社会の変容とともに無効化し、消滅してしまっただけではなく、〈現代社会〉を構成する過去として残りつつけている。

高度成長による社会変容に対する藤田の応答は、〈社会〉への思考の変化でもある。第

一に、レトリックや読むことといった語りの様態の問題が浮上し、〈社会〉は、個々の発言や呼びかけに内在するものとしてとらえられている。第二に、死物や断片に「経験」の痕跡が探されるように、〈社会〉は、時間が堆積していくなかで、過去をふくみもった現在としてとらえられている。ここでは、「批判」は、もはや限界の指摘を意味せず、存在可能性や認識可能性の条件の解明に向かう。その条件の重なるの先に〈社会〉が見出される。

おわりに

本稿は、戦後日本の知識人としての藤田省三が、1970年代に方法論を再編したことの意義を分析し、戦後日本社会の断層と知識人との関係について考察してきた。

藤田は、丸山と方法論を共有しながらも、1970年以降、語りの実践への反省、コミュニケーション様式への反省という主題を前景化させていく。普遍的個人から〈社会〉を組み立てていこうとする戦後の企図は、安保闘争で頂点を迎えながらも、高度成長のもとで流産していく。高度成長が、底なしの状況化を導くなかで、状況と対決する〈個人〉も、国家とは独立の領域とみなされる〈社会〉も、存立困難になる。すなわち、高度成長以後の社会変容は、知識人の存立条件そのものを揺るがす。もはや、単一の権力を否認することだけが批判の課題ではない。藤田は、その都度の発言の形式と作用に注目し、〈社会〉の痕跡の再生に賭けていく。

以上のような藤田の思考の軌跡は、〈社会〉をめぐる想像力の可能性の一つをしめす。同時に、それは、そのようにしか〈社会〉が語りえないという〈現代社会〉の存立の機制の問題とかかわっている。この機制が、我々の生きている現在にまで延長しているのか、あるいは、低成長をむかえ、再び別の機制が生じつつあるのかという問いは、今後、検討されるべき課題であろう。

また、藤田の思考は、〈読む〉行為を構成素とするような〈社会〉をえがく。〈個人〉は通時的に統合されるような一者ではなく、「他人のはじまり」としてとらえられていく。しかし、学知の存立条件は、情報化や市場化によって大きな変容を蒙りつつある。藤田が開示する〈読む〉ことがモデルとなる〈社会〉の可能性に接近するためには、改めて、語ること、読むことといった根源的な水準から知の成立の基盤自体を問い直す作業が必要となるであろう⁽¹³⁾。

いずれにせよ、藤田省三という思考の痕跡は、〈現代社会〉のなかで、いかにして〈社会〉を考察しうるかという可能性の一つとして、我々の前に存在しつづけている。

註

- (1) 「おそらく同時代の中で藤田ほど『高度成長』の腐食力に脅威を感じ、危機意識を抱きつづけた思想家は稀少だったのではあるまいか」[市村 2010: 422]
- (2) 橋爪大三郎は知識社会学と言説分析の理論的差異を考察するにあたって、イデオロギー概念の有効性の失効を論じている[橋爪 2006]。また、内田隆三は、知識社会学が「主体」の形象を支えとすること、現代社会化にともない規律＝訓練権力が変容し、その効果である「主体」の形象も揺らぎつつあることを論じている[内田 1987; 2005]。
- (3) 藤田省三の著述活動については、宮村治雄、飯田泰三、市村弘正といった近しい学者によって、すでにそれぞれの視点からなされた的確な文章が存在している[飯田 2006; 宮村 2009; 市村 2010]。本稿は、両者の方法論の連続と非連続を探究していく。丸山と藤田の連続については、両者の重なりを強

調する〔飯田 2006〕の議論を参照。飯田は、1969 年の『『高度成長』反対』において、藤田が、自らを「親鸞」に重ねて「念仏」と「法然」がはっきりしてきたというとき、また、「或る生の姿或は範疇の混同」において、「日常的散文性に耐える」日本人がいたと書くとき、丸山眞男のことをさすと推測している。

- (4) 藤田のより詳細な経歴については、〔飯田 2006〕を参照。なお、以下では、引用は『藤田省三著作集』および『藤田省三対話集成』によるが、戦後社会に生じた変容にともなう藤田の議論の推移を扱うため、初出の年号をあわせて表記する。
- (5) 1958 年の座談「戦争と同時代」の中で、丸山は次のように発言している。「ほんとに、この一、二年というものの、精神的にスランプを感じるんです。……大げさだけど、ぼくの精神史は、方法的にはマルクス主義との格闘の歴史だし、対象的には天皇制の精神構造との格闘の歴史だったわけで、それが学問をやって行く内面的なエネルギーになっていたようにも思うんです。ところが、現在実感としてこの二つが何か風化しちゃって、以前ほど手ごたえがなくなったんだ。……昔ほど堅固な実体性をもって僕に迫ってこなくなった。……対決していた当の相手が少くもぼくの視野の中でフニャフニャになったために、こっちも何かガッカリして気がぬけちゃった」〔丸山 1958=1998:234-235〕
- (6) 丸山の著作に知識社会学の「存在被拘束性」のテーゼが一貫していること、その理論的意義については、〔新倉 2009〕を参照。
- (7) 「とくに歴史を学んでいるものの一人として私がいつも感じることは、対象の内側からの把握を通じてそれを突き抜けて行くことのむづかしさということである……一つの世界の外側に住んでいる人間が外側からその世界を超絶的に批判することは比較的易しいが、それではその世界の内側に住み、その世界のロジックと価値体系に深く浸潤されている人々を動かして外に連れ出す効果は弱い。さりとてその世界の内側にくまなく立ち入って理解しようとする、いつの間にかミイラ取りがミイラになりがちである。思想史的には啓蒙主義と歴史主義の対立として現れているこのディレンマは実は狭い意味での学問や芸術だけの事柄ではなく、われわれをとりまく反動的な環境——機構・人間関係・イデオロギーなどをすべて含めて——と対決しようとする場合にいつも日常的に当面する問題なのである。」〔丸山 1953=1995:11-12〕
- (8) エドワード・サイード、ガヤトリ・スピヴァック、ホミ・バーバといったポストコロニアル研究の代表的論者は、第三世界出身の英語圏の知識人であるといった属性や、帝国主義批判といった主題、文学や表象を対象とするといった共通項にとどまらず、いずれもが知の問題、さらには、観察と記述の実践に付随する権力作用の問題を扱っている。サイードのオリエンタリズム批判は言うまでもなく、スピヴァックの「サバルタンは語るができない」というテーゼは、デリダの発話行為をめぐる余白の構造を下敷きにするものであり、バーバの異種混淆性の議論も同様の発話の遂行性を踏まえたものである〔Said 1985=1993; Spivak 1988=1998; Bhabha 1994=2005〕。
- (9) このようなバトラーの議論の展開として、〔Butler 2002; 2005=2008〕を参照。後期フーコーの「倫理」の主題にかかわる「批判」概念を検討し、「主体」、「責任」、そして「社会理論」といった概念の再検討を試みている。
- (10) これは、藤田における「大衆」の見方に通底する。1959 年の論文で、藤田は「大衆路線主義」に対して、それが、イデオとしての大衆と、ダーザインとしての大衆の混乱を批判している。「人民大衆」という概念を、規範として、「超歴史的な原動力、歴史を動かす原動力」として考えることは非生産的ではなく、「神のない日本の国に神を創ることになるかも知れない」と述べる。しかし、「そのためにはダーザインとしての『大衆』に対する冷酷な眼を一方で失わないことが必要なことになってくる」。そして、「この『大衆』は『状況』そのものなんだからもちろん自分も含まれる。いかなる知的特権者も全部含まれる。日本の社会的な人間関係の総体をいうんだからみんな自分も含まれる」。知識人というのは、自らに対する「冷たい『眼』の擬人的代名詞」を意味するに過ぎない。〔藤田 1959b=1998:120-1〕
- (11) 「此処では『読む』行為も又私たちの理性の経験となり、想像力の経験となって、直接経験と交わるものとなる。古典の再生は他面で同時に、『読む』ことをもう一つのレベルにおける経験へと化す過程でもあった」〔藤田 1982=1997:202〕。
- (12) 「〔共感と義侠心を含めた在りったけの注目と眼光をその物の中に注ぎこむ時〕、当座の表面的世界が

示す舞台構成を超えて——深みへと超えて——、弱小の敗者の中で光っている普遍的価値が始めて姿を現わすのである」〔藤田 1982=1997:135〕。

- (13) 後年のインタビュー（『世界』1998年2月号、岡本厚との対談「戦後精神史序説」の第二回「名実の逆説」）では、藤田は、戦前のマルクス主義系の読書会（RS）に言及している。藤田は、1971年の「みすずセミナー」開講にあたって、次のように述べる。「しかし、さりとてものを読む努力を止めることはこの惨憺たる日本の文化状況を承認することになるだけですから、到底そういうことはできません。この演習は、読む努力をしようとなさる方々にいくつかのきっかけを提供できればと思って細々と試みるにすぎません」〔飯田 2006:318〕。藤田は、書物というメディアとの関係性、モノとコトへの向き合い方において、もう一つの〈社会〉のあり方を見出そうとしていたのかもしれない。

文献

- Althusser Louis 1970 *Idéologie et Appareils Idéologiques d'État*. 西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家 歩（訳）「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」『再生産について』平凡社 2010.
- Bhabha Homi 1994 *The Location of Culture*. 本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美（訳）『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局 2005.
- Bourdieu Pierre 1980 *Questions de Sociologie*. 田原音和（監訳）安田 尚・佐藤康行・小松田儀貞・水島和則・加藤真義（訳）『社会学の社会学』藤原書店 1991.
- Butler Judith 1997 *Excitable Speech: A Politics of the Performative*. 竹村和子（訳）『触発する言葉——言語・権力・行為体』岩波書店 2004.
- 2002 “What is Critique?: An Essay on Foucault's Virtue,” in Ingram David, *The Political*. Blackwell.
- 2005 *Giving an Account of Oneself*. 佐藤嘉幸・清水知子（訳）『自分自身を説明すること——倫理的暴力の批判』月曜社 2008.
- 藤田省三 1956 「天皇制国家の支配原理」『藤田省三著作集 1』みすず書房 1997.
- 1957 「『現代日本の思想』の思想とその書評」『藤田省三著作集 7』みすず書房 1998.
- 1958a 「反体制の思想運動」『藤田省三著作集 7』みすず書房 1998.
- 1958b 「社会学者の思想」『藤田省三著作集 7』みすず書房 1998.
- 1959a 「『昭和八年』を中心とする転向の状況」『藤田省三著作集 2』みすず書房 1997.
- 1959b 「大衆崇拜主義批判の批判」『藤田省三著作集 7』みすず書房 1998.
- 1960 「『五・一九』前史」『藤田省三著作集 7』みすず書房 1998.
- 1966 「第一版へのあとがき」『藤田省三著作集 1』みすず書房 1997.
- 1969a 「『高度成長』反対」『藤田省三著作集 8』みすず書房 1998.
- 1969b 「根拠律」『藤田省三著作集 8』みすず書房 1998.
- 1976 「レトリックとは何か——その批判的考察」『藤田省三著作集 8』みすず書房 1998.
- 1982 「精神史的考察」『藤田省三著作集 5』みすず書房 1997.
- ・廣末 保 1957 「思想史の再検討」『藤田省三対話集成 2』みすず書房 2006.
- 橋爪大三郎 2006 「知識社会学と言説分析」佐藤俊樹・友枝敏雄（編）『言説分析の可能性：社会学的方法の迷宮から』東信堂 183–204.
- 市村弘正 2010 「解説——藤田省三を読むために」『藤田省三セクション』平凡社.
- 飯田泰三 2006 『戦後精神の光芒——丸山眞男と藤田省三を読むために』みすず書房.
- 石田 雄 2005 『丸山眞男との対話』みすず書房.
- 久野 収・鶴見俊輔 1956 『現代日本の思想』岩波書店 1995.
- ・—— ・藤田省三 1959 『戦後日本の思想』岩波書店 1995.
- Mannheim, Karl 1929 *Ideologie und Utopie*. 高橋 徹・徳永 恂（訳）『イデオロギーとユートピア』中央公論新社 2006.
- 丸山眞男 1953 「野間君のことなど」『丸山眞男集第六巻』岩波書店 1995.
- 1958 「戦争と同時代」『丸山眞男座談 2』岩波書店 1998.
- 1960 『忠誠と反逆——転形期日本の精神史的位相』筑摩書房 1998.

- 見田宗介 1995『現代日本の感覚と思想』講談社.
- 宮村治雄 2009『戦後精神の政治学——丸山眞男・藤田省三・萩原延壽』岩波書店.
- 新倉貴仁 2009「存在拘束性のナショナリズム——丸山眞男と知識社会学」『相関社会科学』18: 69–85.
- 小熊英二 2002『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- 大澤真幸 1996『虚構の時代の果て』筑摩書店.
- 西郷信綱 1975「《読む》という行為」『古典の影——批評と学問の切点』未来社 1979.
- 佐藤俊樹・友枝敏雄編 2006『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』東信堂.
- Said, Edward 1985 Orientalism. 板垣雄三・杉田英明（監修）今沢紀子（訳）『オリエンタリズム上・下』平凡社 1993.
- Spivak, Gayatri Chakravorty 1988 Can the Subaltern Speak? 上村忠男（訳）『サバルタンは語ることができるか』, みすず書房 1998.
- 竹内 洋 2005『丸山眞男の時代——大学・知識人・ジャーナリズム』中央公論新社.
- 都筑 勉 1995『戦後日本の知識人——丸山眞男とその時代』世織書房.
- 内田隆三 1987『消費社会と権力』岩波書店.
- 2005『社会学を学ぶ』筑摩書房.
- 吉見俊哉 2009『ポスト戦後社会』岩波書店.

（日本学術振興会特別研究員 takahitoniikura@gmail.com）